



図3 園庭中の茂みを覗き、カラスより先に卵を見つけると必死に探しています。



図2 卵の様子を見に行く子どもたち。「まだあたためているね」と見守っています。



図1 卵を守る合鴨

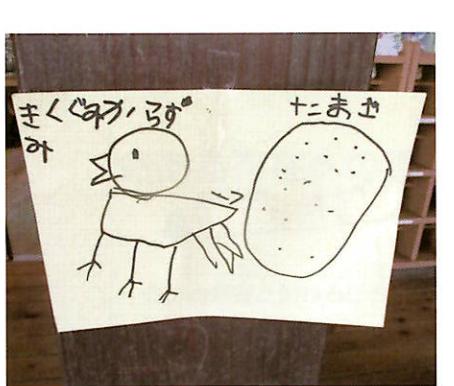


図6 ポスターを貼りだして、幼稚園のみんなに知らせます。



図5 「にせものたまごがへっている！」



図4 カラスがたまごを持っていった瞬間を見た子どもたち。早速「にせものたまごをつくろう！」と作戦を立ててつくり始めました。



図8 「花壇にたまごのかけらがある！」「またカラス来たのかな？」



図7 「今日はがあちゃんのうちに産んでる！」たまごを取りに行く友達を見守ります。



保育実践

概念の枠が構築される前に

東京都 私立清心幼稚園 園長 清水 進

アイガモとのかかわり
園児たちはダンゴムシ、ザリガニやカブトムシ、アゲハチョウの幼虫など様々な生き物を飼育しているが、園で飼っているのはアイガモである。アイガモとの付き合いは長く、歴代の雛との出会いから死別までどれだけのエピソード・物語があつたことか。入園したばかりでまだ表情の硬い子がアイガモの前にしゃがみこんで過ごしていたり、刻んだレタスや菜つ葉を家から持ってきて母子でえさ箱に入れてあげたり、アイガモにあげるために公園で一生懸命ミミズを探してつかまえて来たり、アイガモたちは活動の邪魔になる時や傷付けてしまった時は檻に入れられてしまふが、たいていは自由に動き回り、足洗い用の水で水浴びをしてしまったり、何かの種を植えた鉢の土を漁つてみたりアイガモらしく活動をしている。

現在はこの間まで君臨していた雄一羽が死んで今は「ユリン」「ミミ」「リボン」「キララ」と名付けられた四羽の雌が子どもたちの間を縫つて園庭を歩き回っている。
アイガモは鴨とアヒルの血を引く家禽で野生が弱く飛ぶことができない。雌は成鳥になつてから2年くらいの間ほどんど毎日季節に関係なく産卵し、園のアイガモたちも園庭の植え込みや物陰、水浴び用の盥の中でもう事もあり、時には10個ちかくもの卵を上手に隠して温めている事がある。子どもたちは卵を見つけると大事に持つてくれるのでもう

事件は子どもたち（年長組）の目の前で起つた。一羽のカラスが地面に降り立つと卵をくわえて飛び去つていったのだ。味をしめたカラスはそれからもやつて来ては卵を奪つていった。年長組の子どもたちはカラスがやつて来ると大声や物音で脅したりしていたが、そのうちに「たまご守り隊」を結成しパトロールをしたり、偽の卵をつくつてみたり、皆で相談しながら様々な活動が生まれていった。（図1～8）

園庭の桜の枝の上に丸ごとの卵（殻）を見つけ、そこでカラスが食べたという発想が子どもたちには無くて「なんであんなところに卵があるんだろう」の疑問から想像をふくらませてお話しでき、絵本づくり、さらに読み聞かせまで活動が発展していく。

44ページ 図9

想像の行方

一学期から二学期へと季節が移り変わり、アイガモも羽が生え変わる時期で気が荒くなる様子を見せ、その都度子どもたちは「なんで?」「どうして?」「なにがおこっているのか?」と疑問や質問、知的好奇心いっぱいに瞳を輝かせる。その活動は一人一人の興味関

ででスライスして皆で食べるのが楽しみとなつていて。

大事件発生

3学期卒園を控え、旅立ちを実感した子どもたちは、自分たちがいなくなつた後「たまご守り隊」を引き継いでもらおうと相談して年中のクラスを訪れた。カラスからたまごを守ってほしいこと。アイガモのたまごの探し方や、そつと扱わない割れてしまふことなど自分たちのおもいを丁寧にみんなで伝えていった。年中組の子どもたちも真剣に受け止めて、引き継ぐことを約束した。

集団でひとつの活動に取り組んでいても、その子が考えることや感じることは一人一人異なり「相談」ではみんなが自分の考えを言い合い、時間をかけてまとまっていく。様々な事物や動植物がそこにあるあり方から子どもたちが発見する不思議に対する表現は概念にとらわれず、いかにもその子らしい溢れ、次なる「事件」にあたつても幼児期の今しかできない表現を大切に、その子の心のまなざしの所在を見つけていきたい。

「継続するかかわり」

3学期卒園を控え、旅立ちを実感した子どもたちは、自分たちがいなくなつた後「たまご守り隊」を引き継いでもらおうと相談して年中のクラスを訪れた。カラスからたまごを守ってほしいこと。アイガモのたまごの探し方や、そつと扱わない割れてしまふことなど自分たちのおもいを丁寧にみんなで伝えていった。年中組の子どもたちも真剣に受け止めて、引き継ぐことを約束した。

「実践報告を読んで」

命ある存在への思い入れが生んだ想像力

常磐会短期大学 教授 平野 真紀

命ある存在と関わることは子どもたちの感性をふるわせたり刺激を与える機会を増やすことになります。今回の実践報告を読んでみると、子どもたちはアイガモとの触れ合いからその卵への愛情、そこからカラスの行動へと興味や関心を広げて、それぞれの存在に心を寄せている様子がうかがえ、その時々に応じた様々な感情を湧き上らせたり、その感情が行動を生み出したりするなど、命ある存在が子どもたちの活動に生彩を与えていました。

子どもたちにとってアイガモと共に過ごすことがありました。環境であったところに、一羽のカラスが降り立って卵をくわえて飛び立っていったというあたりまえでない出来事が目の前で起こったことによって、子どもたちの「卵を守りたい」という新たな感情の表れやパトロールやにせものの卵をつくる作戦を立てたといった行動の変容を生むことにもつながるなど、子どもたちの印象に強く残る大事件だったことがよくわかります。

「カラスさん、今何してる?」のテーマで描いた絵と

子どもたちの言葉には、姿を見せなくなったカラスやアイガモの生態の変化を間近で体験してきたからこそ感じ方や表現の仕方が見て取れ、それをそのまま表現している線描には、生活に密着した出来事やそこから想像した世界をそのまま表現していく素直な思いを感じられます。

知識を持っている大人にとってはあたりまえともれる現象であったとしても、子どもたちにとっては驚きや不思議さ、きらめきを感じる瞬間があります。それを前提にして、子どもが感じる瞬間と一緒に感じたり関わろうとしたりする先生の姿勢も子どもたちの製作や描画で表現しようとする気持ちや意欲を継続させているのだと思いました。

次なる「事件」でどんなことが起こっても、子どもの「どうして?」に応えるべく共に感じ、考え、想像しながら待ってくれている先生がいることで、さらに想像する楽しさを感じる機会になることだと思います。

(ひらの・まき)



図9 絵本づくりの様子

「最近たまご見つからないね」「カラスも見ないね…」そんな話から「カラスさん、今何してる?」のテーマで絵を描く活動へと広がりました。



図11 「からすが ようちえんから たまごを とって はわいりょこうへ いった。ちかくに やおやさんもある」

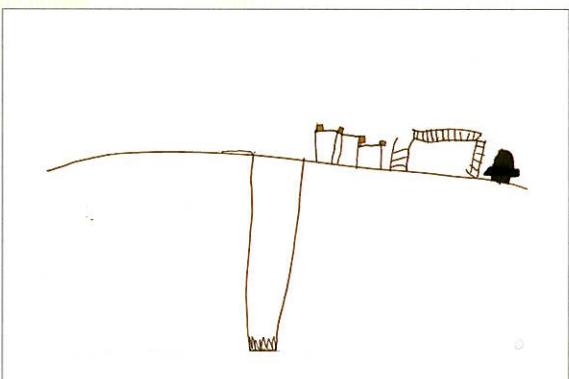


図10 「からすが いつも があちゃんが たまごを うむところに おとしあなを つくって があちゃんが たまごを うむと おとしあなに おっこちるの! たまごが! あの なかに たくさんたまごが たまつて ね よるに からすが とりにくるの」

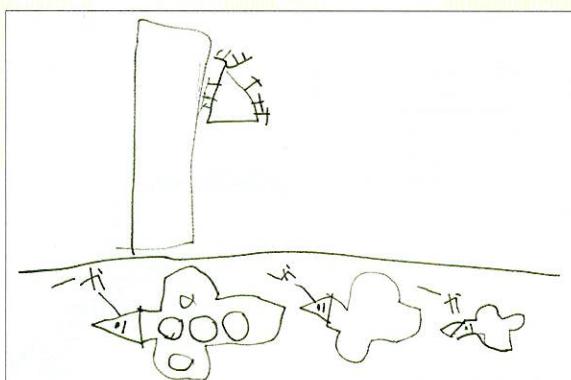


図13 「からすが つちのなかで どうみんしているから ようちえんには こない。つちのなかで たまごをたべているから いきていく」



図12 「あめが すごくじゃまだから からすは こなくなった。あめをよけて たまごをとりにいく。がーちゃんのたまごを からすが さがしている」

① 園の環境設備



子どもたちが園や野外保育で収集した木の実や草花は、子どもが自由に素材を選べるように種類別にボックスに分け、製作やおまごとコーナーに取り入れるなど様々な活動において、自然物がいつも身近な存在にあります。

② 園で大事にしている行事



季節ごとに変わる美しい自然と沢山の生き物に出会える石神井公園で毎週野外保育を行っています。子どもたちはたくさんの自然に囲まれて、見たり聞いたり、触れたりしながら五感を駆使してその時その時の自然を味わっています。幼稚園で使っている道具を野外保育へ持ち出し、その場で製作、絵画活動も行えるよう準備しています。

③ 画材などの扱い方で工夫している点



野外保育や登園時に見つけた、栎の実やどんぐり、まつぼっくりなどの宝物。「おいしくなあれ」の魔法をかけながら味付けをして、おまごとやお店屋さんごっこに活用しました。

一つとして同じもののがなく、魅力的な自然素材。持ち帰って、子どもが興味を持っていることや、やりたいことに合わせて、絵の具やペン、バスなどで模様を描いたり、色が付けられるよう、環境設定を行っています。